

## 我が家の天文年

シガアリソ 東京都

2009年6月、遅ればせながら我が家にも天文年がやってきた。きっかけは、小学4年生の息子が理科の授業で星について学んだことだった。学校から帰るなり「ねえ、夏の大三角って知ってる？」と再放送のドラマに半分耳と目を奪われながらの私に息子は聞いた。「知らん。何それ？」と聞くと、理科のテストの答案用紙を見せて説明してくれた。「ベガとアルタイルとデネブって知ってる？」と息子。「おお、ベガとアルタイルは知ってる。歌の歌詞に出てくるし。デネブは知らん。変な名前ね。」とおやつ準備をしながら私。「そうだね。デネブだけ変な名前。」と息子は笑って、また答案用紙を見せて説明を続けた。星をあらわす点を指差して「これが、こと座で、これが、はくちょう座、そんでこれが、わし座。」星座と言ったらオリオン座くらいしか知らなかった私に、息子は習った事を全部教えてくれた。「ほお、そんなん知らなかったわ。すごいね。」と言うと、息子は得意気に「ぼく、星好きだもん。」と答案用紙をプリント箱に入れた。「ふーん。良かったね。」とおやつ皿を出し、また再放送のドラマに目をやる私の横で、息子はおやつに手を出しながら「でも、ぼく、本物は見てないんだよなあ。」と言った。本や図鑑が好きな息子に、私は何事も経験より勝るものは無いと教えてきた。本で覚えた知識も大切だが、実際に見たり聞いたり触れたりした事の方が数倍もためになると。息子が自分でそれに気付き始めたようだった。

7月、息子の話題は皆既日食のことばかり。「ぼく、楽しみでしょうがない。」とどこかへ出かけるたびに日食グラスをリュックサックに入れて、毎日のようにそわそわしていた。日食グラスはゴールデンウィークに息子だけ参加した星の観察イベントでいただいたものだったが、その頃は星に全く興味が無かったようで、そのときの写真を見ると、息子だけよそ見をしていて、折角なのになあと、親としては何ともしらけてしまったのだが、どうやら子どもの興味というのは急激に変化するらしい。日食グラスをリュックサックから入れたり出したりしている息子に「そんなん、持って行っても、今日は観れんのよ。」と言っても「わかってるけどさあ。」と持ってくる。そうこうしているうちに、夏休み前の保護者会が開かれた。ここで夏休みの宿題の範囲が発表されるのだ。

案の定、今年は「星の観察」が加えられていた。帰宅して、息子は宿題の範囲が書かれたプリントをのぞき込み、いちいち大袈裟に反応しながら読んだ。「本読み、何読もう？漢字、結構多いな。計算ドリル、ほとんど全部じゃん。作文何書こう？自由課題、何作る？星の観察。星の観察！どうする？」息子は「漢字と計算は先にやっちゃうよね。他のはどうする？」と聞いてくる。いつまでもこれじゃあ息子の宿題なのか親の宿題なのか分からない。「自分で考えな。」と言いつ

つも、つい口出ししてしまうのが私の悪いクセだ。「これから先にやっちゃいな。」と。

終了式の日、星の観察の宿題用に二日分の絵と簡単な感想を書く欄が仕切られた画用紙が配られた。「星の観察はこれに書いたらいい。どうする？」と息子。「どうするも何も、観察すればいいことじゃん。明日、フタちゃん家行く時、一応持ってけば。」と言った。フタちゃんというのは、私のいとこの子どもで、息子が妹のように可愛がっている女の子だ。フタちゃんは野辺山に住んでいる。「海の日には山行くなんていいじゃない。」と7月19、20日と一泊で遊びに行く事になっていた。「おお、フタちゃん家だったら、いっぱい観れるかも。」と息子のカバンの中は、星座早見表やら、ガイドブックやらでいっぱいになった。

7月19日、私達はいとこ家族が住む野辺山へ向かった。標高が高くなるにつれ、耳の奥がモーンとなり、雲がどんどん近づいてきた。「うお～こええ。」とガードレールの先に真っ青な空しか見えないことに恐怖感さえ覚え、私達は野辺山へ到着した。いとこ夫婦はそこで高原野菜を作っている。収穫されたレタスやキャベツを入れるダンボールに書かれている通り、まさに「太陽が一番近い野菜たち」を作っているのだ。息子は、さっそく「やりたい病」にかかり、レタスの収穫を体験させてもらった。取れたてのレタスは甘くて瑞々しくてお日様の味がした。夜、子守の助っ人に来ていた伯母夫婦と、いとこ家族、私達とで大宴会となった。取れたて新鮮な野菜たちに舌鼓を打ち、持参した花火を夜空に打ち上げた。そのときだった。それまで気付かなかった満点の星空に、私も息子も大きな口を開けてしまった。「ちょっと、お父さん観てよ。」花火の片づけをしていた夫も空を見上げて「おお。」と口が開いたままになった。

伯母も「へえ、こんなに見えるんだねえ。今まで全然気付かなかったよ。いつも下ばかり見てるからさあ。」と空を見上げたそばから、伯母は足の間にしがみつく孫に目をやった。「じゃあ、また明日。」と言って、私達は近くにとった宿へ向かったのだが、家の明かりが届かなくなると、幹線道路へ出るまでは携帯電話の液晶画面のほのかな明かりを頼りに夜道を歩いた。空を見上げると、青、白、黄、オレンジ、幾万もの星が瞬いていた。宿へ着くなり「星観に行こうよ。」と息子はカバンの中から星座早見表と宿題の画用紙を取り出した。「よし。行くか。」と宿の駐車場へ出て、街灯の明かりが届かないところまで行くと、手を伸ばすと届きそうなところにきらめく星は、海賊の宝箱にぎっしりと詰められた宝石のようだった。「うわああああ。すごい。」深夜だと言うのに思わず声を上げてしまったが、その声も、夜空に吸い込まれていくような静寂がそこにはあった。口をあぐり開けてしばらく空を見上げていたが、あまりの星の多さに、私には、どれがどの星なのかもさっぱり分からない。「たぶんあれがベガじゃないか？」と夫が星座早見表を観ながら指を差した。夫も子どもの頃、天体に興味を持った時期があったようだが、別段詳

しいわけではない。息子と一緒に、天体を学ぼうとしている様子が伺えた。部屋へ戻り、私は、まぶたの裏に焼きついたキラキラを楽しみながら早々に夢の中へ誘われたのだが、「ぼく、もう一回観て来ていい？」と息子は何度も夫と観察に出たようだ。朝起きると、星の観察の宿題は出来上がっていた。

7月22日、息子が待ちに待った皆既日食の日がやってきた。朝からあいにくの曇り空だったが、息子はリュックサックに日食グラスを入れ、私達は羽田空港へ向かった。その日から4日間、息子は北海道へ行く事になっていたのだが、集合時間ギリギリまで展望台で空を見上げることにした。分厚い雲が行き来する中、一瞬、雲の切れ間があった。「出たあ！」「出たあ！」と私も息子も、日食グラスを片手に大騒ぎで飛び跳ねた。夫のビデオにもくっきりと写った太陽はまるで三日月のようだった。息子は「北海道で星の観察してくる。」と言っていたが、あいにくの天気で、星は見えなかったらしい。

息子は8月5日に10歳になった。「誕生日プレゼント何が欲しい？」と聞くと、「天体望遠鏡ともう少し大きい自転車が欲しい。」と言った。

息子は普段、あまり欲しいものを言わないので、義父母も何をあげていいか困っていたということで、天体望遠鏡は義父母から、自転車は私達からプレゼントすることになったのだが、自転車は安全のため、身長が130センチを越えたらという約束になり、9月に入ってからやっと買ってあげることが出来た。我が家に天体望遠鏡があることは、夫が一番喜んでいるようだ。夫も子どもの頃、息子同様に欲しかったらしいが、当時は高価で今のように手軽に買えるようなものではなかったらしい。「今日は、月のクレーターが良く見える。」「今日は、木星。」と、照準を合わせて私達に見せてくれる。息子と順番にレンズをのぞいていると、こういう団欒もなかなかオツだなあと思うのだった。

9月の末、7月に野辺山へ行ってきたたくさんの星を観たことを書いた息子の作文が入賞し、表彰式が行われた。その折、受賞の記念にプラネタリウムを鑑賞させてもらえることになった。息子は昨年、学校の遠足で観たらしいのだが、私にとっては、実に10年ぶりのプラネタリウムだった。「秋の四角形を探してみましよう。」と解説とともに星が矢印で示された。リクライニングシートに体をうずめながら「ほお。」とドーム型の天井を見上げている私の横には、ますます天体にのめり込む様子の息子の横顔があった。

10月に入ると、息子の興味はオリオン座流星群に注がれた。「昼寝するから、夜起きてもいい

い？」と目覚まし時計と共に夜中に起きる予約までしてのぞんだ。19日夜、東側の窓を開けて首をそらせると、オリオン座が見えた。「あ、オリオン座。ぼく、オリオン座は、お母さんに習ったから知ってる。」と息子は言った。そうだ。去年の今頃、息子は、半年以上渋っていたメガネを初めて掛けて、夜空に星が見えることを知った。その頃、気に入って息子が口づさんでいた歌のタイトルが星座の名前だということを指差して教えた事を息子は覚えていたのだ。「弁当箱に梅干三つだよ。」今では、メガネが手放せなくなった息子がオリオン座を指差した。「そう。あの辺に流れ星が観えるらしいよ。」と、親子三人で窓から顔を出した。思えば、我が家の天文年は、息子がメガネを掛けた日から始まっていたのかもしれない。その瞬間、コバルトブルーの光が夜空を走った。